思議ではない。カテ（糧，粮）をカチ（搗）に語源的に結びつけることは不可能かも知れない。しかし，搗布（カヂメ），搗栗（カチグリ）などはカタクリ（カタカゴ）などを通じてカタラとタ行四段活用動詞の derivative として一脈のつながりを感ずる。完成前の上代語においては，言葉は現在より一層自由に變通し得たであろうとは廣く認められていることである。

上記をまとめるに際して小川由一氏の「高野山の植物」（昭和15年）の「サルトリイバラ」の章を參照すべきであつた。氏は多くの方言例を擧げながら曰く，「この驚くべき多數の方言名の懷には皆夫々何等かの習俗が宿されていることを思ふと此の植物と土俗との親しみの深いことが察するに餘あるのであろう。クックヮラとは隨分角ばつた發音であるが，此の系統の名稱は薩摩から九州の西海岸を經て裏日本の西部へかけて分布しているやうで，薩摩，肥後，壹岐等のクックヮラ又はクックヮライゲ（イゲは棘のこと），石見や出雲のカタラ等皆之に屬する。九州東岸の豐後ではクヮンクヮラといひ，安藝の一部でカタラグイというさうであるが，之等も亦勿論クックヮラ系統の方言である。」また，この植物の葉で包んだ餅を紀州でイビツ，オサスリ等といいこれは同時に植物自體の名でもあり，いずれが先に命名されたものか今ではもう判らないといい，紀州ではこの植物をマンジュウノハ，カシワ等と呼ぶ地方もある由。マンジュバの方言は「秋田縣の或地方」にもあるという。小川氏の所說中，小生に關心のある所は以上の樣であるが，これらの記述もまた團子や餅との關係の深いことを示す。啓蒙中の方言に「ゴキイバラ 能州」とあるのは勿論御器茨であつて代用食器としてのこの葉の歷史を語つている。

○ 清澄山にはナガサキシダモドキも產する （倉田 悟）

Satoru KURATA: *Dryopteris Toyamae* Tagawa, new to Honshū (Mt. Kiyosumi, Pref. Chiba).

千葉縣清澄山にオオミツデ一名ナガサキシダ（*Dryopteris Sieboldii* O. Kuntze）が自生する事はかなり古くから判明していたが，これと近緣なるナガサキシダモドキ（*D. Toyamae* Tagawa）も產する事が明らかとなつた。卽ち東大農學部林學科植物學教室に藏されるところの鈴木治太郎氏が 1928 年に採集された實葉一枚の腊葉は田川氏の原記載に良く適合する。尤も側羽片は三對のみであるが，この點を重視する必要は無いと考える。オオミツデも淸澄山には稀な羊齒であるが 林內所々に產する如く，上總側の一小谷には現在數十株が旺盛な生育を示す所もある。ナガサキシダモドキは更に少いものと思われる。後者は從來九州と臺灣にその產を知られていた（上野の國立科學博物館には，田代善太郎先生が旣に古く明治 45 年に，肥前西彼杵郡岩屋村にて採集された腊葉一枚がある）が，遠く房總半島迄分布が及んでいる譯であり，その間の各地，特に從來判明せるオオミツデの產地には期待出來るし，又，生育地に於けるオオミツデとの形態的並に生態的比較檢討も必要であろう。